

### 治安維持法によって検挙され、福岡刑務所で獄死した詩人ユン・ドンジュの生涯

海渡 雄一(秘密保護法対策弁護団)

(映画パンフレットより)



(2025年7月5日 朝日新聞特集記事より)

朝日新聞 > (be report) 没後80年、詩人・尹東柱と大学 ... > 写真・図版

尹東柱と関わりのある地

1914年 「韓国併合」日本、大韓帝国を植民地化  
17 朝鮮半島南端(現・中国吉林省延吉朝鮮族自治州)の明洞村で生まれる

32 漢州(現・平壤)で育ち、龍井の徳星中学入学

35 半導のミッション系崇実中学に転入学。翌年、善社多祥館長問題で龍井へ

37 日中戦争余波に、自国民化政策で龍井

38 ソウルの延禧專門学校(現・釜山大学)文科入学

40 姓氏改名実施

41 アジア太平洋戦争終結

42 延禧專門学校を朝鮮總督府より卒業、手書きの詩集『空と風と星と詩』を完成

44 4月、立教大学文学部英文科入学。10月、同志社大学文学部文化学科英語英文学専攻選科に転入学

43 7月、京都市下鴨区に「独立運動」の嫌疑で逮捕、勾留

10日、「学校出陣」

44 治安維持法違反の罪で懲役2年の判決

2月、福岡刑務所で獄死(享年27)

45 8月、日本敗戦、朝鮮解放

48 ソウルで詩集『空と風と星と詩』刊行

大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国樹立

65 日韓条約締結、韓国と国交正常化

84 日本で詩集『空と風と星と詩』(伊吹郷訳)出版

90 日本の高校現代文教科書に詩が掲載

94 『福岡-尹東柱の詩を読む会』発足

95 同志社大構内に詩碑建立

2006 下鴨路地(京都市府立大高専校舎)に詩碑建立

08 『詩人尹東柱を記念する立教の会』発足

10 立教大、「尹東柱国際交流奨学金」制度設置

17 遠足に行った京都市宇治川ほとりに詩碑建立

25 同志社大、名誉文化博士の学位贈呈。立教大構内に記念碑建立予定

尹東柱(ユン・ドンジュ)の生涯と時代

詩集「空と風と星と詩」から

#### 『序詩』

死ぬ日まで天を仰ぎ  
 一点の恥じいることもないことを、  
 葉あいにおきる風にさえ  
 私は思い煩った。  
 星を歌う心で  
 すべての絶え入るものをいとおしまねば  
 そしてわたしに与えられた道を  
 歩いていかねば。

今夜も星が、風にかすれて泣いている。

(金時鐘訳「空と風と星と詩」2012年岩波文庫)

### <はじめに>

この映画は韓国の国民的詩人である尹東柱(ユン・ドンジュ)の生誕100年を記念して作られた映画で、主人公を演ずるカン・ハヌルは、韓国のトップスターのひとりである。モノクロの美しい映画だ。私は、この映画「空と風と星の詩人」を見るまで詩人尹東柱(ユン・ドンジュ)のことを全く知らなかった。しかし、この映画を見た後、隣国の人々に聞いてみると、彼らは例外なく知っていることがわかった。

そして、東柱は日本の大学(最初立教大学、後に同志社大学)に留学中に、朝鮮独立運動に関わったとされ、治安維持法違反で検挙されて、懲役二年の刑を受け、日本の敗戦のわずか6か月前である1945年2月16日に27歳の若さで、福岡刑務所で獄死した。

私は、治安維持法について調べて本まで書き(「戦争する国のつくり方」2017年彩流社)、共謀罪に反対する活動にも参加してきた。しかし、私は、詩人尹東柱を知らなかった。このことの反省も込めて、この映画を見た後、何冊かの本も読んだ上で、詩人東柱の詩、その人生、検挙された治安維持法違反事件の内容、福岡刑務所における死の真相についてまとめてみたい。

### <尹東柱の生い立ち>

尹東柱(ユン・ドンジュ)は1917年12月30日に、北間島(ブッカンド)明東村で生まれた。この場所は、現在は、中国の吉林省延辺朝鮮族自治州である。

1932年、龍井のキリスト教系学校・恩真中学に入学し、一家も龍井に移住した。1935年に日本の統治下にあった平壤(ピョンヤン)のキリスト教系の崇実中学校に編入学する。しかし、崇実中学は神社参拝拒否問題のために1936年に占領当局によって廃校処分となる。東柱は龍井に帰り、光明学園中学部に編入した。映画は、この時期から始まる。

東柱は、1936年から雑誌『カトリック少年』に詩を発表し始める。1938年には、光明学園を卒業し、京城(ソウル)の延禧専門学校(現延世大学)文科に進学する。

映画でも、主役クラスで登場する尹東柱の従兄弟である宗夢奎(ソウ・ムギョン)は、短編小説を新聞「東亜日報」に投稿し、入選するシーンがある。そして、夢奎は1935年に南京にあった朝鮮独立運動団体に赴いたことがわかっている。このとき、逮捕されている夢奎に東柱が面会に行ったことが、後に特高から、独立運動の共謀の証拠として追及を受けることとなる。

### <映画と史実>

映画では、東柱と夢奎は仲の良い幼なじみとして描かれている。夢奎には政治的な実践志向があり、共産主義を志向する独立運動家として描かれている。しかし、現実の共産党が彼らの郷里で行った蛮行を非難させるシーンも描かれており、夢奎の思想性も複雑である。東柱は詩にも聖書からの多くの引用が見られ、敬虔なキリスト教徒として、そして心優しい詩人として描かれている。しかし、東柱は大学では英文学を学び、詩にはフランシス・ジャムヤリルケの名前も引用されている。

夢奎と東柱と姜処重は、延禧専門学校で文芸雑誌を発刊する。そこに梨花女子専門学校のヨジンが加わる。夢奎はヨジンを政治的な同志として見ている。ヨジンは東柱の詩を読んで、当時の韓国の有名詩人で

ある鄭芝溶先生を訪ねるシーンが描かれている。実際には、ヨジンのような女学生と一緒にいなかったが、友人の羅士行（ラサヘン）と東柱が、鄭芝溶先生を訪ねた事実は確認されている<sup>1</sup>。東柱は、留学先の京都で鄭芝溶の詩「鴨川」を口ずさむほど、この詩人に傾倒していた。

夢奎と東柱は、互いを尊重する親友として描かれているが、夢奎は東柱に「詩を書くことに何の意味があるのか」と厳しい問いを發する人物として描かれている。東柱は夢奎に「芸術を政治の道具にするな」と激しく反論する。このように、この映画は、決して、東柱を単なる民族主義詩人としては描いていない。

しかし、彼が詩人として「朝鮮語」で書くことにこだわったこと、崇実中学校や延禧専門学校在朝鮮の主権が侵害されている中で、民族性を守ろうとする教育を続けていたところであることは間違いがない。しかし、その延禧専門学校も、1941年2月に親日派の尹致昊が校長になり、東柱の卒業後ではあるが、1942年8月には日本人が校長となる。

当時の日本の植民地下の朝鮮では、日本語の使用が義務づけられ、氏名まで日本式に変える創氏改名が強制された。

### <出版できなかった詩集『空と風と星と詩』>

1941年12月、東柱は延禧専門学校（現在の延世大学）を卒業した。この卒業時に、代表作となる自選詩集『空と風と星と詩』の出版を計画する。恩師とも相談するが、「朝鮮語の使用が禁止されている状況で、また、「十字架」「悲しい一族」「また別の故郷」（いずれも主権を失った朝鮮の民の苦しさを歌った）のような作品が日本官憲の検閲を通らない、「時を待て」と忠告され、郷里に帰ってからも出版を模索したが、出版を断念せざるを得なかった<sup>2</sup>。詩集は手書きで3冊だけ作られ、本人と恩師の李敷河（イ・ヤン・ハ）と親友の鄭炳昱（チョン・ビョン・ウク）が保管した。親友が保管した一冊が残され、戦後1948年に出版された。その詩集には、鄭芝溶の序文と姜処重<sup>3</sup>の跋文が付された。生前に一冊の詩集も出版できなかった詩人が国民的な認知を得たのである。次の詩「星をかぞえる夜」は、この詩集の最後を飾るひとときわ美しい詩である。

### 星をかぞえる夜

季節が移りゆく空には  
秋でいっぱい 満ちています。  
わたしはなんの憂いもなく  
秋の中の星々をみな数えられそうです。  
胸の中の ひとつ ふたつと 刻まれる星々を  
今すべて数えきれないのは  
すぐに朝が来るからで、  
明日の夜が残っているからで、  
まだわたしの青春が尽きていないからです。

---

<sup>1</sup> 宗友恵「尹東柱評伝」（2009 藤原書店）263－4頁

<sup>2</sup> 宗友恵「尹東柱評伝」（2009 藤原書店）332頁

<sup>3</sup> 鄭芝溶と姜処重は1950年に勃發した朝鮮戦争の歳に越北し、その後の消息はわからないという。このことから、植民地支配の終了後も朝鮮民族分断の悲劇が続いたことに胸が痛む。

星ひとつに 追憶と  
星ひとつに 愛と  
星ひとつに 寂しさと  
星ひとつに 憧れと  
星ひとつに 詩と

星ひとつに お母さん、お母さん、

お母さん、わたしは星ひとつに美しい言葉をひとつずつ呼んでみます。小学校のとき机を並べた子らの名まえと、佩(ペ)、鏡(キョン)、玉(オク)、このような異国の少女たちの名まえと、すでに赤ちゃんのお母さんとなった娘たちの名まえと、貧しい隣人たちの名まえと、鳩、小犬、兎、らば、鹿、フランス・ジャム、ライナー・マリア・リルケ、このような詩人の名まえを呼んでみます。

これらの人たちはあまりにも遠くにいます。

星がはるかに遠いように、

お母さん、

そしてあなたは遠く北間島(プッカンド)におられます。

わたしは何か恋しくて

この星の光が降る丘の上に

わたしの名まえの字を書いてみて、

土でおおってしまいました。

夜を明かして鳴く虫は

恥ずかしい名を悲しんでいるからです。

けれども冬が過ぎて わたしの星にも春が来れば

墓の上に青い芝草が萌え出るように

わたしの名まえの字がうずめられた丘の上にも

誇らしく草が生い繁るでしょう。

(1941. 11. 5 井田泉訳)

この詩の最後の4節は、その後詩人が歩んだ悲劇の人生とその最後を思い返すと、涙なしには読むことができない。

### <立教大学と同志社大学に留学する>

この詩が書かれた約一か月後の1941年12月8日には日米英が開戦し、太平洋戦争が全面化した。日本留学に際して、創氏改名を迫られ、日本留学直前の1942年2月平沼東柱と改名した。映画では、特高刑事は、最後まで、改名を拒否し、夢奎と同時に改名を届けたことも、二人の間に朝鮮独立運動を遂行する共同の意思があった証左だと責め立てるシーンがある。映画にも描かれているように、東柱は、夢奎とともに日本に渡り、京都大学の文学部を受験、夢奎は合格するが、東柱は受からず、1942年4月に東京の立教大学英文科選科に入学する。

立教大学での東柱の恩師はクリスチャンの高松孝治先生であった。映画には高松先生の自宅を東柱が訪ねるシーンがある。高松教授が日本の中国侵略戦争に反対する信念を持ち、それを学生達に語ってい

た<sup>4</sup>。高松教授とともに、東柱を応援し、詩集の出版を手伝おうとする日本人女学生久美も、素敵な話ではあるが、事実としては確認できない。軍部の圧力が強まる中で、東柱は1942年9月には京都に移る。立教大学の在学中に書かれた詩が残されている。この老教授とは、おそらく高松教授のことであろう。

#### たやすく書かれた詩 (1942年6月3日 立教大在学中)

窓辺に夜の雨がささやき  
六畳部屋は他人の国、

詩人とは悲しい天命と知りつつも  
一行の詩を書きとめてみるか、

汗の匂いと愛の香りふくよかに漂う  
送られてきた学費封筒を受け取り

大学ノートを小脇に  
老教授の講義を聴きにゆく。

かえりみれば 幼友達を  
ひとり、ふたり、とみな失い

わたしはなにを願い  
ただひとり思いしずむのか？

人生は生きがたいものなのに  
詩がこう たやすく書けるのは  
恥ずかしいことだ。

六畳部屋は他人の国  
窓辺に夜の雨がささやいているが、

灯火をつけて 暗闇をすこし追いやり、  
時代のように 訪れる朝を待つ最後のわたし、

わたしはわたしに小さな手をさしのべ  
涙と慰めで握る最初の握手。

(伊吹郷訳)

---

<sup>4</sup> 藤崎健一立教大学教授（当時は学生）の証言

とても、重く悲しい詩だ。映画の中では、この詩の中の「灯火をつけて 暗闇をすこし追いやり、時代のように 訪れる朝を待つ最後のわたし」の一節を特高刑事は、東柱の朝鮮独立の思想を表明したものと指弾する。確かにそのように読むことのできる詩だ。

10月に同志社大学文学部英文学科選科に入学する。1943年7月14日、帰国を準備していた東柱は夢奎とともに特高警察によって検挙される。

同志社大学は尹に2025年2月16日の没後80年の命日に名誉文化博士の学位を贈呈した。京都市の同志社大今出川キャンパス礼拝堂では約200人の参列者が見守るなか、小原克博学長から遺族代表、おいで韓国・成均館（ソンギュンガン）大名誉教授の尹仁石（ユンインソク）さんに学位記が手渡された。

#### <治安維持法違反の嫌疑>

東柱と夢奎の検挙概要は「特高月報」に掲載されている<sup>5</sup>。

二人の共謀した点を要約すると次の通りである。

○日本の敗戦は必至だ。／○日本の国力疲弊した機を利用して朝鮮独立の与論喚起を為し民衆を蜂起させる。／○在京都朝鮮人学生数名を目標に働きかけ同志の獲得に努める。／○同志となった高と三名でしばしば会合して、話しあった。／○朝鮮人たるの意識を忘れず朝鮮固有の文化を研究し朝鮮文化の維持向上を図る。／○民族意識の啓蒙のために大衆文学に依る事が最も感化が大で影響が大きい。／○朝鮮が独立するためには内輪争いではばばらになってしまう民族的欠点を是正しなければならない。／○朝鮮独立の先決問題は民族の文化水準の向上であってその責任は我々にある。／○大東亜戦争の講和候約の際朝鮮独立を条件として持出されるべきである。／○日本敗戦の機に独立運動を起せば朝鮮人総てが集結し得る、其の際朝鮮出身軍人も一役果すべきであり我々も一身を犠牲にして立上らねばならぬ。／○同志獲得に焦る必要はない。

このように、高を交えた三人の話し合いの内容は穏当で常識的である。朝鮮の民族としての自覚を忘れず、文化の向上のために働く、戦争が終わるまでは日本の軍人としてきちんと働く、日本が戦争に敗れた後に軍人として朝鮮の独立のために働こうということをお互いに確認し合ったということに尽きる。そのような会話が、国体変革=朝鮮の独立を目的とする、治安維持法の国体変革結社の目的遂行の罪に問われたのである。この事件は「在京都朝鮮人学生民族主義グループ事件」と名付けられているが、具体的な組織があった証拠はほとんどなく、学生の下宿での語らいが犯罪事実とされている。敗戦時に蜂起するという意味合いを持つ合意は、敗色の濃い大日本帝国の特高警察にとっては、現実的な方針であるが故に、まだ具体的な行動計画はなくても到底容認しがいのものだったのであろう。

私たちが、共謀罪の反対運動の中で、危惧した「人の思想」そのものを処罰するという役割を、当時の治安維持法がこのような形で果たすようになっていたことが、この事件からもよくわかる。

これから政府が提案しようとしているスパイ防止法案の外国代理人規制法案、外国勢力活動透明化法案なども、同様の役割を担うことが想定されるだろう。

この映画の中では、多くの朝鮮出身の学生を集めた前で、夢奎が挑発的に演説し、そこを特高が襲って検挙する場面が描かれるが、このような事実は、両人の残された判決にはない。映画化のための脚

---

<sup>5</sup> 宗 前掲書 422 頁以下『特高月報』一九四三年一二月分(内務省警保局保安課発行)

色であると考えられる。それでは、このような下宿屋での3人の学生の話し合いが記録され、証拠化され、犯罪として構成されていったのは、如何なる捜査によるものだったのだろうか。

映画では、特高刑事が、二人を尾行しているところが描かれる。しかし、事実はさらに陰湿である。二人が同志として口説き、話し合っていた三高生の高の下宿の隣室に特高刑事が張り込み、三人の会話を逐一記録していたというのである。このことを事件のただ一人の生き残りで、検挙されながら起訴猶予となった高氏が下宿屋の主人の言葉として生々しく語っている。<sup>6</sup>。現在では禁止されている「室内傍受」の捜査方法が、隣の部屋で壁に耳をあてて聞き取るという恐ろしくアナクロな捜査方法が戦前日本では実行されていたことがわかる。

### <福岡刑務所での獄死と人体実験の可能性>

1944年2月22日、尹東柱と宋夢奎は起訴され、3月31日に京都地方裁判所で治安維持法違反・目的遂行罪に問われ、両名とも懲役2年の実刑判決を言い渡された。尹東柱と宋夢奎は福岡刑務所に収監された。その一年後、日本の敗戦を6ヶ月前にした1945年2月16日に福岡刑務所で、わずか27歳で死亡した。

刑務所から死亡を知らせる電報を受けた父尹永錫と叔父の尹永春が、福岡刑務所に駆けつけ、2月18日に宋夢奎と面会する。その面会室で、宋夢奎は「刑務所内で中身のわからない注射を打つように強制され、こんな姿になった。東柱もそれで死んだ。」と述べた。

映画では、福岡刑務所内で、大学の医師とおぼしい人物が、注射を打たせ、その後計算をやらせ、その注射で被験者の知的能力がどのように変わるかを実験している様子が克明に描かれていた。

私は、このシーンを見て、大きなショックを受けた。もちろん、日本軍は中国で731部隊による残酷な人体実験を重ねた。その被害者の多くは中国で日本軍に捕まった中国共産党員であったと言われている。

しかし、戦時中とはいえ、軍ではなく、日本の法務省の下で管理運営されていた福岡刑務所内で、人体実験が行われていたというような情報は、聞いたこともないし、あり得ないことのように思われたからである。私がこの原稿を書こうと考えたのも、この映画の描かれ方に史実として根拠があるかどうかを確かめたいと考えたからであった。

宗友恵『尹東柱評伝』は、尹永春の証言以外にも、できる限りの情報を集めて、このような事実があったと論証しようとしている。また、NHKの元プロデューサーで尹東柱の生涯をNHKスペシャルにまとめた多胡吉郎氏は『生命の詩人尹東柱』で、この疑問を掘り下げている。

当時、福岡刑務所では朝鮮人受刑者は厳正独居の対象とされ、日本人受刑者とは隔離されていたこと、福岡刑務所には九州大学医学部の医師達が研究目的で自由に出入りしていたこと、当時の福岡刑務所で受刑していた朝鮮人受刑者の中に投薬実験を受けたと証言しているものがあることなどが報告されている（『生命の詩人尹東柱』196-212頁）。多胡氏の結論は、当時刑務所でチフスが流行していたため、その予防接種がなされた可能性もあり、真相はわからないが、人体実験が行われていた可能性は否定しきれないというものである。

---

<sup>6</sup> 宗 前掲書 414頁

### <失われた詩稿>

東柱は、日本に来てからも詩作を続けていた。多くのノートが検挙時に警察に押収され、東柱は、留置場でその詩を日本語に訳する作業をさせられていたところを見たという証言もある。しかし、事件の記録は、戦争犯罪の隠ぺいのため敗戦後に焼却されたとみられ、東柱の命とともに多くの詩も失われた。あまりにも残念であり、詩人を愛する隣国の人々にどのように詫びたらよいのだろうかと思ふ。

この短い報告の最後を詩人の詩集の中でも印象深い「自画像」で結ぶこととしたい。

### <問われる冬の時代を生き抜く覚悟>

敗戦後 80 年、尹東柱没後 80 年を経て、高市自民・維新連立政権の下で、戦争準備が加速され、衆院解散が行われた。選挙後の国会には確実にスパイ防止法案が提案されるであろう。日本の国が当事国となる戦争の危機が深まり、その民主主義が深刻な危機に陥っている今、私たちも、鏡に映るみずからの姿を見つめ、これから長く続くであろう冬の時代を生きぬいていく覚悟を確かめるために、この詩は私たちに勇気を与えてくれるだろう。

### 自画像 (1939 年 専門学校 2 年)

山の辺を巡り 田園のそば 人里離れた井戸を  
独り尋ねては そっと覗いて見ます。

井戸の中は 月が明るく 雲が流れ 空が広がり  
青い風が吹いて 秋があります。

そして一人の男がいます。  
なぜかその男が憎くなり 帰って行きます。

帰りながら ふと その男が哀れになります。  
引き返して覗くと男はそのままいます。

またその男が憎くなり 帰って行きます。  
帰りながら ふと その男がなつかしくなります。

井戸の中には 月が明るく 雲が流れ 空が広がり  
青い風が吹いて 秋があり  
追憶のように男がいます。

(伊吹郷訳)